

### 1. 今回の研修における目的やねらい

- ①タンザニアにおける食料生産の全体概要をつかむことと、個々人の農作業の営みや具体的な農作業に対する考えをインタビューし、児童が日本の食料生産と比べて考えられるようにすること。
- ②O&D プロジェクトのねらいや経過、成果をインタビューや視察を通して知り、国際協力の新たな視点をもつこと。
- ③現地の小学校・中学校の見学を通して、青年海外協力隊の方々の仕事について知り、自らの授業や学級経営に生かすとともに、教育の分野における国際協力についての単元構成（社会）の教材とすること。

### 2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

- ①全体概要については、視察や JICA 職員の方の話の聞いたり、事前に JETORO の報告書を読んだりする中である程度つかむことができた。しかし、農業に携わる人々の生活ややりがい、努力や工夫に関しては詳しくインタビューをするところまでは至らなかった。
- ②O&D は、当初「お金がないから住民がやれ」と半ば投げやりな活動であるという印象があったが、自分たちの住んでいる地域そして国を自分たちが創っていく、その一歩がレンガを使った幼稚園や診療所であるという考えに変わった。村人の「O&D そのものが我々の教育である」という言葉からも読み取れる。
- ③タンザニアの国家プロジェクトの一つに理数教育の推進があり、そのため日本人理数教師が多く派遣されていた。日本の制度と大きく違い、進級試験のための授業（日本でも受験のためと考えてしまえば同じであるが）という印象が強く、「自ら考え自ら表現する」「クラス内の学び合い」という授業ではなかった気がするが、タンザニアの現状としてとにかく理数をマスターした技術者が必要であるということが感じられた。国家を形成する人間をつくる教育の分野に日本人が関わっているということは大きな国際貢献であり、教材になると考えた。

### 3. タンザニアから学んだこと

- 日本人的価値観をそのまま持ち込んではいけないということ。例えば、我々にとっては粗末な建物で衛生的ではないと思われるものも、そこに住む人が不自由をと感じていなければ、我々は「不幸だ、かわいそうだ」と考えるべきではない。
- 医療的な観点で不衛生だと考えられることはどんどん改善していかなくてはいけないと思う。例えば、安全な水は生きる上で必ず必要であるし、感染病予防や、薬、医療環境などお金を投じなくてはいけないものはまだまだある。お金をかけることはやはり大切である。
- O&D は日本でも導入するべきである。特にタンザニアにおけるファシリテーターのように、利害に関係ない人物がファシリテートするという文化が根付いたほうがいい。日本では民主的といいつつも、誰かの利害によって物事が決まることが少なからずある。

### 4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

- ①5年生の社会科の食料生産の単元において、タンザニアの食料生産と比べることで、日本のこれからの在り方について考えることができるようにする。自給率が高いことがいいことなのか悪いことなのかを様々な資料をもとに考えられるようにしてもらいたい。
- ②6年生の社会科の国際協力の単元において、今回出会った JICA の職員の方々や青年海外協力隊の方々を教材に単元を構成する。児童には「なぜ ODA が必要か」「青年海外協力隊は必要か」というような具体的な問題について自分なりの考えを表現してもらいたい。

### 5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

- 何よりも自分も目で見て、肌で感じる事ができたことが一番の収穫であった。人と出会い、話をするこ

とで少しは理解できたと思っている。そしてさらに知りたいと思ったことが自分の成長につながると思う。

- いろいろな場所を見るというのも大事だと思うが、個人的には「せまく深く」のほうが理解が深まるような気がする。例えば、マセウ村にはもう2日ぐらい通って一日密着してみるなどの方法でフィールドワークできたらよかったと思う。学校訪問+交流は1回でもよかったかもしれない。

## 6. 海外研修での役割(日直や各担当)を振り返っての感想・提案など

### ●日直

振り返りの記録はそれぞれができていて、日直がとするという事はなかった。夕食後の振り返りはかなり難しい。しっかりと記録をとってデータにするのであれば振り返りのもち方そのものを考える必要がある。たとえば、日程の中に夕食前に振り返りの時間をとるなどしたほうがいい。また、出発の点呼はたいして大変ではないので、団長・副団長がすればよい。訪問先へのあいさつも、訪問先担当者がやったほうがすっきりしてよい。

### ●その他係

- ①団長：とても大変だと思う。何よりも全体を把握してはいけなくてはいけないので、このままの内容でいいと思う。あいさつの時は、団長も必ず代表者と一緒に行ったほうがよい。
- ②副団長：役割があいまいだったので、ホテルのチェックイン・チェックアウト、ミーティングの司会など具体的な仕事があったほうがよい。
- ③記録：事前の準備でも何かしら仕事があるとよい。メーリングリスト管理、授業の準備など。日直を置けば、毎日のミーティングの記録は必要ないので、一人でもよい。
- ④会計：とても大変だったと思うので2人いてよかった。
- ⑤交流：隊員とのやり取りやプランの作成など大変だったと思う。今回はうまくみんなで協力してできたので、来年も【隊員とやり取りする人】【実際に一緒に準備する人】の2人体制がいいと思う。

役割分担は、【現地での仕事】【日本での仕事】に分けて考えたほうがよい。

## 7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

まずは、このような機会を与えてくださった JICA 横浜、JICA タンザニア事務所の方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

アフリカは一生行くことができない土地だと思っていたが、意外と遠くないということがわかり、また、アフリカ以外でも行ってみたい国には行こうと思えば行くことができるという自信にもなった。また、その際に観光とは違う視点で国を回ることができるという選択肢が増え、自分の幅を広げることができた。自分の経験を伝えることはできるが、やはり自分で経験すること以外に理解することはできないと思う。児童には「百聞は一見に如かず」ということを強く伝えていきたいと感じた。

## 8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

- それぞれの役割をそれぞれが果たしたことで最高のチームになったと思います。本当にありがとうございました。このメンバーでなければならなかったと思います。JICA 横浜の皆さんの人選は素晴らしかったと思います。私はこのメンバーと研修ができてとても幸せでした。
- 大切なのはこれからの授業である。授業は面白いにこしたことはないが、おもしろい・おもしろくないが授業の本質になってはいけないと思う。確かに私たちは貴重な経験をしたし、あれを伝えたい、これを見せたいと思うことはたくさんある。しかし大切なのは、児童が授業の後に何を学び、どのように考えるようになったのかということであり、各教科領域の指導要領にのっとった教育活動が本質になると思う。でないと、「あ〜おもしろかった」で終わってしまう。

## 9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
----	-----	----

8月11日(日) -12日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	成田→ドーハ、ドーハ→ダルエスサラームの道のりは意外と遠くなかった。空から見たダル市内は立ち並ぶ家々が多く、とても都会に見えた。
8月12日(月)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	空港から市街地への道中、木陰で集まって何をすることもなく、「ただいる」という人たちが多く、この人たちは仕事をしないのだろうかという疑問に思った。また、車が停止すると道路上にも関わらず物売りの人たちが窓をたたいて様々なものを売っていた。水やスナックはともかく、サングラスやTシャツなどはだれが買うのだろうかと思った。
8月12日(月)	本日の振り返り	大西所長の話聞き、タンザニアはアフリカの先頭を走って経済発展している元気な国だということを知ったが、家々や町にいる人、道路などを見ていると「本当か?」と強く疑問に思った。 マラリアは一番気にしていたことであったが、タンザニアでも同じように深刻な被害が出ているということを知り、原因がわかってもワクチンができないし、予防薬を買わない現実に驚き、またなんとも言えない思いだった。
8月13日(火)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	O&ODについては、日本で多少調べていたが、木全次長の話聞きある程度概要がつかめた。やはりどう考えても、「金はない、だから自分たちでできることをやれ」というのに日本人が関わっていることが国際貢献につながるのか疑問に思った。教育の分野では、小学校までが義務教育と聞くことを聞き、やはり中学校までを義務教育にする予算はないのだと理解した。また、留年という制度は個人的には賛成で、日本は勉強に対する危機感というか、本気度を試す場が小学校にはなさすぎるのではないかと感じた。
8月13日(火)	モロゴロへ移動	郊外に出ると、道路沿いにはやはり何もしていない若者や、バイクにただ座っているだけの人が多く、「仕事がないのだな」と感じた。野菜や果物を売っている店が多かったが、その店の近くの人たちで消費しているのではと思った。 幹線道路は一本道で信号もなく比較的スムーズだったが、とにかく遠かったので、タンザニアの広さを感じた。
8月13日(火)	本日の振り返り	木全次長、阿部さんの話を聞き、住民のニーズが本当に政府や他国に伝わっているのかと強く疑問に思った。また国土の広さと人口のバランスから、インフラ整備の難しさを感じた。
8月14日(水)	Maseyu 村 Mazizi 地区 Maseyu 村 Mjini 地区 サイト視察	村人は無休なのにも関わらず、集まって話をすることをさほど面倒くさそうにしていなかった。レンガを一人一人がつくり、技術者にお金を払って組み立ててもらい、屋根を行政が準備してくれるのを待つというほど、幼稚園が必要だったのだろうかという疑問に思い、質問したところ、やはり最優先は「水」ということがわかった。であれば、水をなんとかするプロジェクトのほうが先だと思ったのだが、住民ができることは幼稚

		園をつくることだったようだ。保健所も先に立ててしまい、設備や水の問題は解決しておらず、動き出すには早くても10年かかるということだった。見通しがなく先に作ってしまうあたりがなんともいい加減に感じた。小学校の床もぼこぼこしたレンガ造りで決してよい施設とは言えない。やはりお金が必要である。
8月14日(水)	専門家との懇談会	「プロジェクトをしないプロジェクト」がO&ODであると聞き、少し納得がいかなかった。では何のために専門家がいるのだろうか。しかし、一日を振り返り、専門家と話を聞いていくうちに、このプロジェクトの本質は物質的な支援ではなく、知的支援もしくは教育なのではないかと少しずつ考えるようになった。自分たちの地域を自分たちでつくっていかうとする文化がなく、なんでも政府に頼るばかりでなく、できることとできないことをはっきりさせて、優先順位をつけること、住民をファシリテートすること、そしてそのファシリテーターを育てることがこの国には必要なのだ、この国の人たちが気付いたのだろうと思った。
8月14日(水)	本日の振り返り	村の生活は携帯電話で大きく変わったようで、現金を得るために何かしらのものを小売りする必要がでてきたようだった。例えばつくっている作物、育てている地鶏、カンガ、石鹼などである。水道もないところに携帯の電波が届いていることにも驚きだが、銀行を介さない送金システムを村民が使っていることにもさらに驚いた。 明日のインタビューでは、村の人をグループに分けてインタビューを行うことになった。
8月15日(木)	Maseyu 村 Mjini 地区 関係者インタビュー	グループの構成を、村における立場が上の人を一人入れる構成にしたのだが、これが大きな失敗で、質問に対してその人がほとんど答えてしまい、他の村民の方に話を聞くチャンスがほとんどなくなってしまった。集まってくださった方々は全員農業を営んでいた。作っているものは、トウモロコシ、キャッサバ、ヒエ、また養蜂をしている方もいた。引退されてお孫さんがやられている年配の方もいた。稲作については、時期は違うものの日本と工程は全く同じだったが機械を使うということではなかった。トラクターはレンタルで、1haあたり約2500円で、借りている人は村内で50人程度ということだった。ほとんどが手作業である。一人一人の作付面積は2haが平均的なものであり、大規模農業とは程遠い。一番おもしろかったのが、私たちが家庭菜園と言うつもりで説明したのが、自分の食料をとる狭い土地で作っていると勘違いされたことである。二階さんが指摘してくれてわかったことだが、この国での農業とは「業」ではなく、自給自足のことではないかと思った。
8月15日(木)	小学校視察、村人との交流	昨日訪問した小学校とは違い、建物も大きく先生の数も多かった。先生は比較的立派な洋服を着ていて、町から出勤しているようだった。授業に関しては、先生

		<p>が話して、生徒が質問に答えるというスタイルだったが、楽しそうと言うよりは緊張感のある授業だった。先生もほとんど笑っていなかった。自分の授業スタイルとは大きく違っていた。</p> <p>交流では、住民とダンスや歌を通してふれあうという貴重な体験ができてよかった。日本で練習してきた甲斐があり、楽しんでくれているようだった。長縄はタンザニアにも独特のやり方があるようで、遊び・ダンスの要素が多く、数を競ったりするというのではないという日本との違いを感じた。</p>
8月15日(木)	市内視察 (モロゴロ)	<p>マーケットには人が多く、ここで人々が消費活動をしているという印象で、活気があった。しかし、品質はどうかと考えると、日本に輸出しても売れるものは一つもない。国内消費だけでいいのであればこのままでもいいのではないかと思う。また、内陸部ということもあり、魚は見るができなかった。赤堀隊員が町の人ととても仲が良く、その様子を見てると、必要以上に警戒することもないのではないかと感じた。写真をとられることに関してはとても敏感だった。</p>
8月15日(木)	隊員との懇談会	<p>田中専門家の「困っている人がいるのに助けられない理由はない」という言葉が印象的だった。田中さんは元NGOの方で、緊急支援をされていた方なので、O&amp;ODは少し気が長すぎるという考えをもっているような印象だった。南スーダンという危険地帯で援助するには、短期間に一定の結果が求められるようで、田中専門家は必要なのは「水」だという考えだったようだ。危機管理も完璧で、移動には必ず2台で移動し、燃料・食料を積み、衛星電話を持ちという完璧な準備で支援に向かっているようだった。そのような現実もあるということを知り、このタンザニアの現実はアフリカ全てを表わしているのではないと改めて感じた。</p>
8月15日(木)	本日の振り返り	<p>他のグループのインタビューの中で一番印象的だったのが、村民の「O&amp;OD そのものが我々の教育の場である。そのことに価値があり意味がある。各集落に学校を作るなどという発想はなかった。昔から団結力はあったが、コミュニティーのためという発想が生まれた」ということだった。この振り返りで強く感じたのは、O&amp;ODを住民が歓迎しているということであり、必要としているということだ。この政策が教育分野にまで発展すると、持続的にO&amp;ODがこの村に続いていくことになると思った。また、私の用意した日本の紹介についてメモを取る人がいたり、質問したりする人がいて、発展ということにとっても関心のある人たちだということがわかった。</p>
8月16日(金)	ムグラシ中等学校 赤堀隊員	<p>ムグラシ中等学校はマセユの学校と違いとてつもなく大きく、職員の数も多かった。授業に遅刻してきた生徒には、穴を掘るという罰があるようだった。職員用のトイレには鍵がかけられていた。その隣に児童用のトイレがあった。生徒はみな制服を着ている。セーター</p>

		<p>を着ている女子生徒もいる。日本でも気温が高いのに上に羽織っている人もいるので、どこも同じであると感じた。全校生徒の 900 人を前に自己紹介をしたが、反応が良く授業が楽しみになった。</p> <p>授業では、日本の紹介、新聞紙の兜作り、習字を行った。比較的生徒の反応も良く、スムーズに行うことができた。中学生としてはとてもフレンドリーという印象だった。少し不良のような生徒もいたが、日本と同じように服装が乱れていたりしていた。</p> <p>午後の交流では、時間も多く取ってもらったものの、少し間延びしてしまったような気がする。バルーンは生徒たちの反応も良く、何回も同じことをして楽しんだ。しかし、バルーンを大きく膨らますという目的よりも、それをやるということに夢中になっていて、大きく膨らむことはなかったし、上に飛ぶこともなかった。ソーラン節を踊ったり、歌を歌ったりしたが、一緒に何かをするという雰囲気にはなかなかならなかったが、最後は生徒たちに囲まれて写真を撮ったり名残を惜しんだ。</p>
8月16日(金)	ミクミ国立公園通過 モロゴロへ移動	<p>キリン、ゾウ、インパラ、シマウマ、サルを見ることができた。国立公園で保護区ということもあり、人の気配はしなかった。観光という目的があるにしても、昔からそこに住んでいた人たちにとっては、人間と動物が共存していたのに、急に追い出されたという思いなのであろう。保護区という考えも、なんとも難しいと感じた。何を大切にするのか。人間・動物どちらを優先するかという問題は難しい。</p>
8月16日(金)	本日の振り返り	<p>ムグラシ中学校はコミュニティーがお金を出し合って作った学校であり、政府から先生たちに給料が出ているようだった。学校の設立をコミュニティーがつくれるということ自体に驚く。日本では、何かをつくる時の障害が大きい。しかし、次のステップへの試験の通過率の低さや、テストの点数の低さからすると、質の高い教育というのはまだまだ難しい問題だと思う。理数教育を推進しているという割には、実験器具が少なかったり、実験室が無かったりと、物理的に不足しているものが多い。そのような教具を充実させることも必要であると思う。</p>
8月17日(土)	バガモヨへ移動	<p>バガモヨへの移動の途中で道路工事の様子を見た。しっかりと舗装されたまっすぐの道だった。しかし一方で、その横を走る我々の道は 30 km を出すのも難しいぐらいボコボコの道で、やはり発展の途上であると改めて認識した。また、途中で立ち寄った教会には遠足で来ているらしいタンザニアの小学生がいた。スクールバスで来ているようだったが、着ているものがとても立派で、上層階級の子どもであるように思われた。</p>
8月17日(土)	市内視察 (バガモヨ)	<p>昼食に訪れたレストランは一週間前にできたということで、内装はとてもきれいで、土のままの道路のバガモヨの町には似つかわしくなかった。</p>

		<p>奴隷博物館ではアラブの商人が奴隷貿易をする際に、ザンジバルに送る前の拠点だったバガモヨの歴史を学ぶことができた。人を物のように扱った歴史がついに数百年前に行われていた事実になんともいいようのない感情が沸き起こった。アフリカの人たちはアラブの商人に対抗する手段を持たず、脅されて売られていった。そのことを話していた時のフィリップの表情はとても悲しそうであった。</p> <p>海岸線にある魚市場では、水揚げしたての魚を油で揚げている人たちが多かった。生の魚もアイスボックスに入っていたが、そんなに多くなかった。後で聞いた話だが、生魚を保存する方法がなく、すぐにウジがわいてしまうようで、そのため油ですぐ揚げているようだった。船は木で作られていて、とても遠洋にでられるものではなかった。漁に出る時間帯を聞いたところ、日本とほぼ変わらず、暗いうちに出て朝方帰ってくるということだった。</p>
8月17日(土)	本日の振り返り	<p>奴隷貿易について、現在はもちろん行われてはいないが、小野さんの話によると人身売買というものが日本では頻繁に行われているらしく、自分でもネットで調べたところ、そういう事実もあるということだった。</p> <p>奴隷貿易の奴隷にされた人たちは、断ることが許されず（断ると殺される）現在の人身売買と同じには考えられないのではないかと思う。しかし、現在にも人をお金で買うという非人道的なことが行われている世の中はなんとかしないといけないと思う。</p>
8月18日(日)	ダルエスサラームに移動	<p>バガモヨとダルエスサラームは距離的には近く、観光客も多く訪れやすいのではないかと感じた。道も舗装された道で、とてもよかった。ただ、沿道の家々はこれまで見てきたタンザニアの家とさほど変わらず、土壁と茅葺のものが多かった。</p>
8月18日(日)	教材等購入	<p>ティンガティンガ村では、価格交渉を行ったが結局安くはならなかった。しかしよく考えてみると、板に描かれたものが5000 シリング (250 円) と考えると、適正な価格かどうか悩むところである。途上国だから安く当たり前というこの考えが、途上国がフェアにトレードできない大きな原因ではないかと反省した。</p>
8月18日(日)	本日の振り返り	<p>ティンガティンガの創始者から受け継がれてきた技術は現在 120 人のアーティストによって世の中に表現されているということだった。そこで話し合われた「適正価格」はいったいどれぐらいなのだろうかと思う。</p> <p>フェアトレードということを考えると、我々が購入した価格はどう考えても適正価格ではない。しかし、我々は安く購入したいというこの欲望が適正価格を下げているのだと感じた。</p>
8月19日(月)	キパンランガンダ中等学校 米澤隊員	<p>中学校訪問はムグラシ中学校に続いて二校目になる。校長先生はとてもフレンドリーな方で、我々を歓迎してくれた。この中学校には電気も水道もなく、一番遠い生徒で8キロの通学路を通ってくるそうである。</p>

		<p>最初に米澤隊員の物理の授業を見た。今日の単元は「表面張力」で、米澤さんは、ビーカーにかみそりの刃を沈め、その後かみそりの刃を水面に対して平行に置くと浮く仕組みが表面張力ということをスワヒリ語で説明していた。ムグラシ中でもそうだったが、中学校は英語で授業するはずであるが、米澤さんもスワヒリ語で授業していた。後で聞いたところ、やはり英語では授業内容が定着せず、以前行った数学の模擬試験のクラス平均点が100点満点で3点ということだった。この難しいカリキュラムが効果的なのだろうかと思った。米澤さんもとても苦労しているようだった。</p> <p>ブレイクの時間には校長先生はじめ学校の先生方とお話をする機会があった。校長先生は立派なスピーチを用意してくださっていた。チャイとサモサ、チャパティをいただきながら、先生方とお話をした。私が話した先生2人は女性の先生で、未婚ということだった。マセユ村では早期結婚の傾向があったが、高学歴の女性（この場合は教員だが）は、晩婚の傾向にあるというのは、日本も同じなのではないかと思う。</p> <p>交流では、1年生のクラス40名のクラスで行った。プログラムとしてはムグラシ中とほとんど同じだったが、ムグラシ中ほど反応がよくなく、とても難しかった。兜作り、習字はみんな上手にできていたが、その後の紙飛行機作りは、作り方が難しかったので、何度もやり直した。難しいことを教えることに時間がかかるのは日本もタンザニアも同じで、これから日本でも気をつけなければいけないことであると感じた。キパランガンダで全ての交流プログラムが終わった。やはり、中学生はとてもシャイで、一緒にソーラン節をするという雰囲気にはなかなかならず、思春期なのだなあと感じた。</p>
8月19日(月)	教材等購入	<p>スーパーにはタンザニアの日用品が売っていたが、私の印象としてはとてもきれいに商品が陳列されていて、価格は日本人にとってはお手頃であったが、おそらくタンザニアの人たちにとっては中流階級以上の人たちのものなのではないかと思った。</p>
8月19日(月)	本日の振り返り	<p>キパランガンダでは校内に学校教育目標が掲示してあったということだった。私もそうだが、どこまで現場の教員が意識をして授業をしているのかということだと思う。天然資源があっても利用する技術と技術者がいないから理数に力を入れている。その人材を育てるための国家試験の内容を米澤さんに聞いたところ、定義を問うものが多いということだった。考える力というよりも知識を詰め込んだ人間がとりあえず急務という国策なのだろうかと感じた。日本のような方法が良い悪いではなく、状況の違いと考え方の違いであろう。その生徒を教えている先生方も待遇や現状に満足していないようで、将来経済学者になりたいという人もいた。</p>

		<p>日本での授業について振り返りを行った。それぞれ行ったアンケートやインタビューを資料にして授業を組み立てることになると思う。どんなことを子どもたちが学ぶのか、どのタイミングで資料を提示するのか、学びの連続性になっていくのかとても楽しみである。</p>
8月20日(火)	JICA タンザニア事務所 報告会	<p>一人一人の報告では、それぞれが感じたタンザニアの印象や見たもの、聞いたことに対する考えを聞き、私もとても勉強になった。</p> <p>JICA の方々の話で一番心に残っているのは、友成次長の「この仕事にはロマンがある、教育の仕事も同じだと思う」ということである。我々は我々のフィールドで精一杯やるのが、世界のためになるのではないかと改めて感じた。この経験を子どもたちに還元するために、しっかりと授業計画を立てたいと思った。</p>
8月20日(火)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<p>大使というとてもえらい方が我々の訪問を受けてくださり、気さくにはなしてくれたことにとっても驚いた。大使を質問攻めにしてしまったが、大使はタンザニアの知識が豊富で、それに対する自分の考えもしっかりと持っており、赴任したばかりとは思えなかった。大使の言葉で印象に残ったのは、「国と国との障壁はもはやなく、活躍の場は世界に求めなくてはいけない、日本だけで考えてはいけない」「日本の安全保障と経済発展のために、タンザニアと関わっていくためには、援助という方法もあるが、ビジネスという切り口で関わっていく」という2つだ。国を背負ってタンザニアで職務に当たっている人の考えを聞くことができとても勉強になった。この言葉はそのまま担任する子どもたちに伝えたいと思った。</p>
8月20日(火) -21日(水)	タンザニアから日本までの移動中および日本到着	<p>帰りの飛行機はなかなか飛ばなかった。私の席の隣あたりで席のことについて保安官の人を含めて口論をしていた。私が聞きとった言葉は「Your ticket is Tomorrow」だったが、まさかあれだけのチェックをされていて出国できてしまうことに驚いた。大使が「自殺するぐらい一生懸命悩む人がいないってことがこの国の問題かもしれない」と言っていたことを思い出した。いい加減にもほどがある。</p> <p>無事に成田に帰ってくることができた。この研修を企画してくれた JICA の方々に心から感謝申し上げたい。</p>